

## 近世アジアの皮革 4. 日本の武具と馬具

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

### 1. はじめに

甲冑は胴を主体とし、兜、袖および小具足からなる。戦闘が源平合戦の頃の様の一騎懸けから、応仁の乱以降の徒歩集団戦に変化し、それに伴って甲冑は重厚な大鎧から足さばきがよく軽快な胴丸や腹巻に移行した<sup>1, 2, 3)</sup>。元々は上級武士が大鎧を着用し、下級武士が胴丸を着用していた。武将用に装飾された胴丸が作られ、兵士用に一層軽快な腹巻が普及した。胴丸は長側（ながかわ 衡側）を一続きに作り、右側を引合せとし、腹巻は背面を引合せとなっている。胴丸と腹巻を補完する頬当てや籠手、はいだて 佩楯（膝部）、脛当などの防具を添えたものを具足と称していたので、室町末期以降、兵器の変化と西洋甲冑の輸入により改良され、普及したものを旧製の鎧に対して当世具足と称し、これが江戸末期まで作られた。

幕末になり革製甲冑も大いに使用されたが、火力の強い洋式銃の導入と戦法の変化から甲冑重武装は効果がなくなり、使用されなくなった。維新の戦争の多くは羅紗地や木綿地の衣服が着用され、明治政府は洋装軍服とした。

東アジアにおいては、鞍は漢代後半頃に革製品から木製品に転換したと考えられる。木製鞍は古墳時代に輸入され、日本でも作られた。正倉院の鞍は木製のまえわ 前輪と後輪とを居木でつないだ鞍橋の上に革製のくらじき 小さな鞍褥（馬氈）、下の馬背にしたぐら 鞆（切付）

となめ 屨背（肌付）、腹部にあおり 泥障（障泥）がある。これが以後の基本形となり、種々の装飾が施され江戸末期まで続いた。明治になると、ヨーロッパから実用的な革製鞍が輸入され普及した。

### 2. 甲冑

甲冑の素材は主として牛革や鉄であり、その形状は短冊状の小板（こざね 小札）を横に連ねて綴じて（したからみ 下緘）、横板（いたざね 板札 板物）にし、この横板あるいは一枚で出来た板札を上下に連ねて綴じた（おどし 威）。平安前期において勅命により、鉄甲から革甲に変更され、平安中期頃までは、甲冑は革札を使用した。平安後期頃には鉄を交ぜた強固なものが作られた。

胴丸は古くは黒漆の塗固めをしたが、南北朝時代頃から裏包を施し、漆塗りした栗色の牛革や馬革で一段ごとに包んで補強するようになった<sup>1, 2)</sup>。金具廻の胸板、押付板（背の上部）、脇板などは表面を藻獅子韋で包み裏面には栗色革を張り、または漆を塗った。革所としては、兜の裏張、吹返（こうもりつけ 兜前面）の包韋、蝙蝠付（腰部）、袖のこてずり 籠手摺韋（裏面）などがある。胴丸は一般に胴前面のつるぼしりがわ 絵模様の弦走韋を張らない。室町末期以降歩兵用の胴丸に各部の小具足が付いたいわゆる当世具足が製作された。表面を馬革や皺革で包んだ具足も作られた。歩行の便と重量軽減を図るため草摺（くさずり 腰

部)は革製を原則としていた。1543年の種子島に鉄砲が伝来し、また南蛮鎧が渡来されると、甲冑はより強固な鉄が多用されたが、胴裏に革が張られた。西洋甲冑を改造、あるいは模造したものを南蛮胴具足と称した。家康の南蛮胴具足は幾つかあり、胴が鉄製の鳩胸形で裏が漆塗の韋張、あるいは草摺が革札のものがある。南蛮胴ほとんどが鉄製であるが、胴の縁や裏、草摺や佩楯などには革が用いられた。

桃山時代から江戸時代にわたって金泥で彩色した具足が流行したが、家康が大高城に兵糧を運び入れた時に着用した具足で、大高城兵糧入具足とも呼ばれている金陀美具足(金溜塗具足)は胴が鉄地に金溜塗を施し、胴裏が馬革包であり、佩楯が金泥革地である<sup>3,4)</sup>。家康が江戸に幕府を開き、戦乱は治まったが、将軍家はじめ諸国の大名は甲冑を代々新造して家名継承の印とした。吉宗は鎌倉時代の大鎧を模倣させた紺糸威鎧があり、その弦走には三匹の獅子牡丹文染韋が用いられ、草摺には黒漆韋札が用いられている<sup>4)</sup>。慶喜の卯花威胴丸の吹返は韋包で縁に皇室ゆかりの紫菊唐草錦韋を用い、臙当の鉸具摺に黒漆皺韋を用いている。銃火器が発達した江戸後期には、軽量で活動しやすい煉革(本誌No.164 P.2)札甲冑が推奨された。札板を塗固めにせず横板下緘みが露出したままのものを揺ぎ札と称し、煉革札に多く用いられた。江戸末期の故実家で幕臣の栗原柳庵が薩摩藩に招かれ、甲冑製作の指導に当たったので、世にいう薩摩の甲冑は煉革胴丸であり、金属部が兜の天辺の座(頂部)や鍬形(兜の飾り)、札を金具廻や兜鉢に取り付ける八双鉾等くらいで、その他は兜を含めすべて煉革であった(図1)<sup>5)</sup>。

珍しい具足に家康の熊毛植胴具足がある。兜、胴、草摺、佩楯ならびに臙当など

全体に熊毛が張ってある<sup>5,6)</sup>。現在では皮地に毛がわずかに存在するだけである。秀吉の家臣片桐且元が着用したと伝えられる惣黒熊毛植具足は兜と臙当を備えた二枚胴具足で全体に月の輪熊の毛皮が張られていた(2012年大阪城で筆者検分)。

昭和8年(1933)に樺太で江戸時代のアイヌのものとする掛甲式革鎧が発見された。アイヌの鎧はトドの皮で作られていると言われるが、遺物も札、威、革所はすべて皮革であり、脇板には熊毛が残存していた<sup>5)</sup>。北海道博物館や国立民族博物館にはこの複製品があり(2001年筆者検分)、その説明にはトド皮の小札を鹿革の紐で綴っているとある。

### 3. 弓

重籐しげどうという将軍家ならびに大将の軍陣に用いる弓は竹に漆を付けたさび皮を巻き、その上に籐を巻き、握りに紫革や黒革を



図1 栗原柳庵流煉革胴丸

巻いた<sup>7)</sup>。なおさび皮は馬の腹子の皮であり、鞆にも用いられた。弓を射る際に弓を持つ手を保護するために用いた革製の鞆はこの時代見られなくなったが、矢を射る手指を保護する革手袋（弓懸）は用いられていた。

矢を入れる用具に上代の鞆（長方形の筒形）や胡祿（矢立式）、中世・近世の箆や空穂がある。徳川宗睦（尾張家9代）の熊毛逆頰箆は鏃を入れる箱（方立）の外側に熊毛を上向きに貼ってあり、これは武家の正式な箆とされた（図2）<sup>6)</sup>。熊毛を用いるのは公卿以上とされ、一般的には猪の毛皮を用いた。箱の後部は赤鞆し革を用い、箆を腰に付ける受緒・根緒には錦革と菖蒲革を用い、かけ緒には菖蒲革を用いた。方立を鞆し革で包んだ革箆は略儀に用いられた。予備の弦を巻く弦巻は多くは革で環の様に作った。矢羽を雨露から保護するために、竹網代製の籠（穂）を取付け、



図2 熊毛逆頰箆

その上から毛皮を被せた空穂ができた<sup>8)</sup>。猪、鹿、猿等の毛皮が一般に使用され、ときには虎、豹等の毛皮も使用された。毛皮をかけたものを騎馬空穂といい、かけないものを大和空穂と称した。

#### 4. 柄と鞆

太刀の鞆や鐔等にも革が用いられ、鞆を革で包んだ太刀を革巻太刀と称し、煉革を用いた鐔を練鐔と称した<sup>7)</sup>。鞆にはオランダから輸入された金唐革（本誌No.169 P.2）も使用された。鞆に付ける帯執には菖蒲革を用いた。鮫皮も太刀の柄や鞆に使用されており、鮫皮を扱う鮫屋は京、江戸、大坂にあった<sup>9)</sup>。鮫皮は江戸時代多量に輸入されており、柄鮫は産地により、チャンペ（現ベトナム）、カスタ（カンボジア）、サントメ（インド）と呼ばれ、鞆鮫は皮の模様や粒の数によって呼ばれ、梅の花のような大きな粒のあるカイラギザメ（梅花皮鮫、花梅華皮）が最高級であった<sup>9, 10)</sup>。鮫皮は高価であったので、剥落した粒をカイラギザメの腹に入れ込んで細工した入鮫や、鮫皮模様を金や銀の板に打ち出した打鮫という模造品が造られた。古くから外国産のエイの皮を日本近海で獲れる鮫と同じと思われていた。鮫とエイは板鰓類という同じグループに属する軟骨魚類である。家康の黒漆打刀揃の柄が鮫皮包で、その上を薫草で菱に巻いてあり、また古くは奈良時代の正倉院の金銀鈿莊唐太刀の柄にも使用されている。

湿気による鞆の損傷や太刀の錆の防止に毛皮の袋を鞆に被せた。使用者の身分によって規定があり、四位以上は豹皮、五位以上は虎皮、六位以下は海豹や鹿の皮が用いられた。尾張家九代宗睦所用の太刀拵（長さ104.3cm）の豹皮尻鞆（長さ53.1cm）が徳川美術館に収蔵されている（図3）<sup>6)</sup>。



図3 豹皮尻鞆



図4 鞍

同館には、初代の義直が戦場で軍勢に号令をかけた際に手にした<sup>はぐまげ</sup>白熊毛采配があるが、この毛は実はチベット・北インドなどに生息するヤクの毛であり、白色の他に赤色と黒色もあり、当時甲冑や武具の装飾<sup>かぶと</sup>に好んで使用された。家康の南蛮胴具足の兜<sup>かぶと</sup>の裏は白熊毛である。明治維新の際の官軍将校が目印と威厳のために兜無しで兜裏を着用した。

1860年の桜田門外の変以降、刀を抜きやすくするために、柄と鞆を別々の袋に入れるようになり、それに姫路革が多量に使用された<sup>11)</sup>。姫路革は川に晒して脱毛し、塩と菜種油で鞆した牛革である。

槍鞆は室町時代多くは黒漆塗であったが、次第に長大となり、江戸時代には持ち主の存在の標識として馬印<sup>うまじるし</sup>を兼ねて毛皮や革、鬣、鳥毛で覆い、大名行列の立道具<sup>たてどうぐ</sup>として威容を示した。毛皮には貂、月の輪熊、ヤク、虎、豹など、革には菖蒲文の鹿革や金唐革など、鳥毛には雉や鶴などが用いら

れた。播州竜野の脇坂家の馬印が貂の毛皮であり、それが槍鞆に直され、世襲されて大名行列に用いられた（2004年龍野歴史文化資料館で筆者検分）。司馬遼太郎の「貂の皮」に、雌雄の2本の槍鞆は黄色の毛並みがあざやかで江戸や東海道筋の庶民にまでその見事さが知られていたと記されている。

## 5. 馬具

ドイツの皮革博物館に日本の17世紀（江戸時代）の鞍が収蔵されている（図4）<sup>12)</sup>。木製の鞍橋の上に革製の小さな鞍褥、下の馬背に鞆と屨背、腹部に泥障と鐙がある。鞆と泥障は白革と記され、牡丹と牡丹・獅子がそれぞれ描かれている。これらは鹿革の絵革である。泥障は装束の汚れを防ぐものであったが、後に飾りとなった。熊・虎・豹・水豹等の毛皮が使用され、後に牛馬の皴革<sup>ちからがわ</sup>が使用された。鐙を鞍橋から吊るす力革も鞆や泥障と同様に鹿革であろう（別

の鞍の説明では鹿革とある)。なお正倉院の鞍の力革は牛革であった。鞍橋には銀象嵌細工が施されているが、古くから漆塗・蒔絵・螺鈿などの装飾も施されていた。桃山時代以降は蒔絵が鞍や鐙の装飾の主要な技法となった。家康使用の鞍は葛切付と黒皺革包肌付、葛製馬氈、白い牛革包の力革であった<sup>4)</sup>。姫路城で展示されていた鞍は形状がドイツのものと類似していた(2004年筆者検分)。鞆の素材は目視では不明であったが、泥障は外側が赤い革で、内側が黒い革であり、中に何か詰めたような膨らみがあった。姫路革製品には、龍や藤花の文様の泥障(江戸時代、縦50余、横70余cm)や灰褐色(元々は乳白色か?)や黄金色の切付と馬氈がある<sup>11)</sup>。これらには鬼しば革と称する厚くてしば(皺)の大きい革のものがあるが、これらの革は外国産の牛あるいは水牛の革の可能性もある。ちなみに江戸時代に牛皮と水牛皮が多量に輸入されている<sup>10)</sup>。

戦国武将達が虎・豹・熊等の毛皮で飾った馬甲うまよろいを付けて出陣したが、江戸時代の大名も鞍馬を飾るのに多く虎皮を用いた<sup>8)</sup>。虎皮は中国や朝鮮からの輸入品あるいは贈物のため数量が少ないので、他の皮に虎の毛うえを挿して虎皮に似せて造った。これを植うえ虎皮とらかわといい、京都の工人が造った<sup>9)</sup>。

江戸時代の鞍に前後輪を練革十数枚重ねて成形した練革張鞍と、木地に数枚の革を漆で張り付けたものがある<sup>13)</sup>。さらに木製の鞍橋全体あるいは両輪の表面のみを革で包み込んだ革包鞍がある。寛永3年(1626)銘の金唐革包鞍鐙(東京国立博物館蔵)や万治3年(1660)銘の梅花鮫革包鞍鐙(東京神田神社蔵)等である。

## 6. まとめ

戦国時代には徒歩集団戦が多くなり、動

きやすい当世具足が発達普及し、また西洋甲冑を改造、あるいは模造した南蛮胴具足が出現した。当世具足は江戸時代になっても受け継がれたが、その後、戦闘がなくなり平穏となり、装飾性あるいは復古調の甲冑が造られた。銃火器が発達した江戸後期には、一層軽量で活動しやすいねりかわ煉革胴丸が推奨された。

籠や空穂にそれぞれ熊と猪の毛皮、猪と鹿、猿等の毛皮が使用された。刀剣の柄や鞘に外国産の鮫革と称するエイの革が多用された。

木製の鞍橋の前後輪を練革で成形した練革張鞍や鞍橋を革で包んだ革包鞍が造られた。鞍褥や鞆、泥障に装飾性のある文様や皺のある革が用いられた。

## 文 献

- 1) 山岸素夫 宮崎真澄：日本甲冑の基礎知識，雄山閣出版(1990) P. 74, 182.
- 2) 笹間良彦：図解日本甲冑事典，雄山閣出版(1976) P. 117.
- 3) 尾崎元春：原色日本の美術 21 甲冑と刀剣，13版，小学館(1978) P. 181. 図版 60.
- 4) 「大徳川展」主催事務局編集・発行：(2007) P. 9.
- 5) 笹間良彦：日本甲冑大図鑑，柏書房(2007) P. 84, 216, 217, 300.
- 6) 徳川美術館：徳川美術館尾張徳川家の至宝，中日新聞社(2013) P. 62, 78.
- 7) 伊勢貞丈：貞丈雑記 3, 4，東洋文庫 450, 453，平凡社(1985, 1986) 3-P. 73; 4-P. 41.
- 8) 西村三郎：毛皮と人間の歴史，紀伊國屋書店(2003) P. 329.
- 9) 不明：人倫訓蒙図彙，東洋文庫 519，平凡社(1990) P. 133, 167.
- 10) 竹之内一昭：江戸時代の皮革の交易，皮革科学, 59 (2013) P. 115.
- 11) 林久良：姫路皮革物語，私家版(2012) P.

13, 18.

- 12) Deutsches Ledermuseum: “ Deutsches Ledermuseum angeschlossen Deutsches Schuhmuseum”, Graphische Werkstatte, Offenbach (1956) P. 90.
- 13) 根岸競馬記念公苑編：日本の漆芸 鞍と鏡, (財) 馬事文化財団 (1990) P. 23, 32.